

第6章

佐賀県の産業
【No.1】

佐賀県の陶磁器

佐賀県では古くから唐津焼、有田焼（伊万里焼）をはじめとしたやきものづくりが盛んです。県内各地のやきものにはどんな特徴があるかを探ってみましょう。

□海を渡って伝えられたやきものの文化

日本の代表的な陶器・唐津焼は、安土桃山時代頃に唐津市北波多で始まったといわれています。

その後、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役、1592～98年）の際、多くの朝鮮陶工が連れて来られ、朝鮮の技術の導入が進み、肥前の国（佐賀県・長崎県）でやきものづくりが広がったのです。

大陸から各領内に広がったやきものの産地分布図



藩領図（藤野保著『佐賀藩』を参考に作成）

□佐賀県の現在のやきものの産地



ポイント
肥前には、陶土や陶石(原料)、燃料(まきになる木)、水力(川)など、窯業を営む条件が揃っていました。

□重要無形文化財「色絵磁器」保持者

無形文化財とは、「演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で、我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの」を指します。その技術や芸術を受け継ぐ人々のうち、国から認定された者は「重要無形文化財保持者」（通称「人間国宝」）と呼ばれます。

色絵磁器とは？

磁器の表面に赤・黄・緑・紫等の色絵具で文様を表現する技法。



（佐賀県立九州陶磁文化館蔵 今泉今右衛門氏寄贈）
色絵薄墨墨はじき雪文鉢



●色絵磁器（今右衛門黨提供）

十四代 今泉今右衛門さん（有田町）

代々受け継がれてきた色絵磁器の技術を今に伝え、「墨はじき」という伝統の白抜き技法を駆使した作品も制作しています。

2014年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されました。

佐賀県の概要
第1章

佐賀県の歴史
第2章

佐賀県の人物
第3章

佐賀県の文化
第4章

佐賀県の自然
第5章

佐賀県の産業
第6章

佐賀県の食文化
第7章

【唐津焼】



(佐賀県立九州陶磁文化館 蔵)

てつえ はぎもちんづば えがらつ
鉄絵萩文壺 (絵唐津)
(1590～1610年代)

鉄の成分を含んだ絵の具による力強い絵柄が特徴です。



(唐津市教育委員会 提供)

唐津焼の始まりの場所の一つ、唐津市の飯洞甕下窯跡(国指定史跡)。

かつゆうおおがめ
褐釉大甕 (1629年)

江戸時代前期以降～昭和前期まで、大甕などの容器も多く作られていました。食べ物の貯蔵などに使用されていましたが、現在はほぼ廃れてしまいました。



(佐賀県立九州陶磁文化館 蔵)

発祥年代: 安土桃山時代
発祥地: 唐津市北波多岸岳周辺(その後、伊万里や武雄、長崎北部にも広がった)
創始者: 朝鮮陶工たち
原料: 陶土(有色粘土)が主(原料は土)

特徴
・九州の陶磁器で最も古い歴史がある
・土ならではの温かみがある
・桃山～江戸時代初期の代表的な茶陶の一つ(茶道具としての器)
・水を吸いやすく、たたくとにごった音がる。

からつもの

唐津焼と呼ばれるのは当初唐津の港から出荷されていたからです。京都や大阪をはじめとした西日本から東日本に広く知れ渡り、やきもののことを総称して「からつもの」と呼ぶ地域があります。



(佐賀県立九州陶磁文化館 蔵)

わらばいゆうづば 斑唐津
藁灰釉壺 (斑唐津)
(1580～1590年代)

見どころスポット

佐賀県立九州陶磁文化館

住所: 西松浦郡有田町戸乙3100-1
電話: 0955-43-3681
開館時間: 9時～17時
(入館は16時30分まで)
休館: 毎週月曜日
(祝日の場合は開館)
12月29日～31日
料金: 無料
(特別企画展は大人有料)

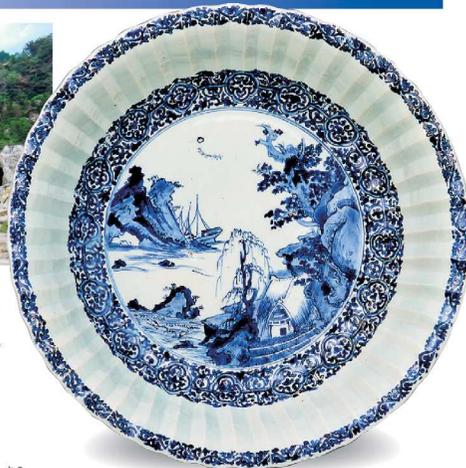


【有田焼 (伊万里焼)】



(佐賀県観光連盟 提供)

朝鮮陶工の金ヶ江三兵衛(通称李参平)が最初に磁器の原料となる陶石を発見したと言われる泉山磁石場(国指定史跡)。



(佐賀県立九州陶磁文化館 蔵 今泉書郎氏 寄贈)

そめつけきんすいもんりん かおむら
染付山水文輪花大皿 (重要文化財)
(1640～1650年代)

皿の内外面に小高く盛り上がった部分があり、中央には山水文様が描かれています。



(佐賀県立九州陶磁文化館 蔵)

いろろ かちゅうもんざら
色絵花鳥文皿
(柿右衛門様式)
(1670～1690年代)

純白の素地を生かして、優美な文様を施しています。

発祥年代: 江戸時代初め(1610年代)
発祥地: 有田
創始者: 朝鮮陶工の金ヶ江三兵衛など
原料: 陶石をくだいた粉が主(原料は石)

特徴
・かたくて丈夫な白い器
・美しい赤や黄や青の模様が施されているものが多い。
・水を通さず、たたくと澄んだ金属音がする

調べてみよう!

「有田焼」は江戸時代から明治時代になるまで「伊万里焼」と呼ばれていたのはなぜ?



(佐賀県立九州陶磁文化館 蔵)

いろろ せきれいもんざら
色絵鶺鴒文皿
(鍋島様式)
(1700～1720年代)

鍋島焼

徳川将軍への献上品として作られた鍋島焼。有田の岩谷川内で始まり、1660年代頃に伊万里の大川内山へ移転。廃藩置県まで作られ、採算を度外視した日本最高級の磁器と言われていました。

※佐賀藩は技術の漏えいを防ぐため、関所を設けて厳重に管理しました。

第6章

佐賀県の産業
【No.2】

佐賀県の伝統産業

佐賀県には、県内のさまざまな地域で生まれ、長年にわたり人々の文化や暮らしに根ざした産業から生まれた品々があります。伝統的な技術や技法が今も受け継がれています。



鹿島錦を織り上げる様子 (佐賀県経営支援課 提供)

生まれた背景

江戸時代末期、鹿島鍋島家の藩主夫人、柏岡の方が網代天井からヒントを得て、これを日用品に応用できないかと側近に相談したことがきっかけとなりました。

金・銀の箔や漆などを施した和紙を糸、絹の糸を緯糸として手作業で織り上げる錦。伝統的網代文様など多くの文様が織られ、美術品としても発展しました。



佐賀錦 (佐賀市)

1910 (明治43)年、ロンドンで開催された日英大博覧会では、当時「鹿島錦」と呼ばれていたものを大隈重信の計らいで「佐賀錦」と名付けて出品。「佐賀錦」が一般的に定着するきっかけになりました。

(佐賀県経営支援課 提供)



肥前びどろ (佐賀市)



ジャッパン吹きの様子 (佐賀県経営支援課 提供)

生まれた背景

1852 (嘉永5)年に佐賀藩は西洋の最先端の科学を研究・実験する精煉方を設立。その後身の組織で働く副島源一郎が創業したガラス製造の専門工場が今も生産を続けています。

伝統的な技法「ジャッパン吹き」により作られるガラス製品。型を用いずにガラス管に息を吹き込みながら形を作る技術は100年以上も受け継がれています。



鍋島織通 (佐賀市)



鍋島織通を織り上げる様子 (佐賀県経営支援課 提供)

生まれた背景

江戸時代初期、長崎で中国人から織通の技術を教わった古賀清右衛門が「扇町毛氈」として織ったのが始まり。佐賀藩3代藩主鍋島綱茂が生産を奨励し、藩の御用品となりました。

上質な木綿を使った伝統的な「蟹牡丹」柄が特徴の敷物。「トン、トン」と糸を叩き締めながら一目ずつを手で織り上げます。熟練の職人でも一日に織ることのできる幅は数cmです。

諸富家具 (佐賀市)



(佐賀県経営支援課 提供)

家具を組み立てる様子

生まれた背景

佐賀市諸富町では鉄道や橋の開通などにより1935 (昭和10)年頃から、家具産地としての歴史を誇る福岡県大川市との往来が盛んになり、新しい木工技術が伝わりました。



(佐賀県経営支援課 提供)

木工技術とオリジナリティをいかしたデザイン性のある家具が特徴で、木の時計やおもちゃなど、個性あふれる木工製品を製造するメーカーも多数あります。

くすり (鳥栖市)



(鳥栖市教育委員会 提供)

行商で薬を販売した「くすり屋さん」



(中富記念くすり博物館 蔵)

生まれた背景

田代 (現在の鳥栖市東半分と基山町の地域) では、長崎街道の交通の要衝であったことなどから薬作りや商売の知識が得られ、貼り薬を中心とした薬作りが盛んになりました。

佐賀県において製薬業は大きな産業の一つです。中でも日本四大売薬の一つと言われる「田代売薬」は江戸時代中期に起こり、県東部では今もその流れをくむ製薬会社が残っています。

■その他の産業

■浮立面 (鹿島市)

楯や桐、檜などで作られる鬼の面。伝統芸能の「面浮立」を踊る際に着ける面として、使われてきました。

■名尾手漉和紙 (佐賀市)

自家栽培した楳 (楳の一種) を原料に作られる和紙。提灯の紙のほか、さまざまな用途で使われます。

■弓野人形 (武雄市)

博多人形師の原田亀次郎が1882年に武雄市弓野地区で製作した土人形が始まりと言われています。

■西川登竹細工 (武雄市)

明治初期に農業の副業から始まりました。細い竹ひごを編み込む繊細な技術が特徴です。

見どころスポット

中富記念くすり博物館

住所：佐賀県鳥栖市神辺町 288-1
電話：0942-84-3334
開館時間：10時～17時 (入館は16時30分まで)
休館：毎週月曜日 (祝日の場合、翌日)、年末年始
料金：大人 300円、高校・大学生 200円、小・中学生 100円



調べてみよう!

田代売薬のくすりの販売方法の「先用後利」って、どういう意味だろう?



佐賀県の概要
第1章

佐賀県の歴史
第2章

佐賀県の人物
第3章

佐賀県の文化
第4章

佐賀県の自然
第5章

佐賀県の産業
第6章

佐賀県の食文化
第7章

第6章
佐賀県の産業
【No.3】

佐賀県の農畜産物

自然に恵まれた佐賀県では、気候や地形の特色を生かして、米や野菜、果物、佐賀牛など全国に誇れる農畜産物がたくさんあります。

米

- 各地域の環境に適した米が栽培されています。
- 高品質ブランド米作りも盛んです。



もち米の
作付面積(割合)
全国第1位
(令和6年度)

(佐賀県園芸農産課 提供)

二条大麦

- 米との二毛作で5月中下旬頃に収穫されます。
- 焼酎や麦ごはんの原材料になります。



作付面積
全国第1位
(令和6年度)

(佐賀県園芸農産課 提供)

佐賀県の水田農業の特徴

- 1 水源を確保するため古くから農業用水路が整備されてきました。
- 2 一年を通して水田をフル活用し、表作(夏作)として米や大豆、裏作(冬作)として麦やたまねぎが栽培されています。
- 3 大豆を安定して収穫するために、水田をいくつかのブロック(区画)に分け、毎年、作付するブロックを変えていくブロックローテーションを行っています。



大豆

(PIKTA 提供)



ただ
棚田

県内各地の山間部には棚田と呼ばれる水田もあります。

(さが棚田ネットワーク 提供)

れんこん

- 白石町での生産量が県内一。
- もちもちとした食感が特徴。



出荷量
全国第2位
(令和6年度)

(「さが」農産物ブランド確立
対策推進協議会 提供)

干拓で
できた土地
白石平野

江戸時代以前から有明海を少しずつ干拓して作られた白石平野は「重粘土質」と呼ばれる栄養豊富な土壌で、おいしい作物が育ちます。

たまねぎ

- 白石町を中心に栽培。
- 甘くてミネラル分が豊富。



出荷量
全国第2位
(令和6年度)

(「さが」農産物ブランド確立
対策推進協議会 提供)

お茶

- 佐賀県はお茶栽培の発祥の地と言われています。
- 玉緑茶や煎茶、紅茶などに加工されます。



(「さが」農産物ブランド確立対策推進協議会 提供)

ミカン (かんきつ)

- 露地ミカンは天山山麓と多良岳山麓を中心に栽培。
- ハウスミカンは唐津市を中心に栽培。
- かんきつの新ブランド「にじゅうまる」が令和3年にデビュー。



ハウスミカン
出荷量
全国第1位
(令和6年度)

(佐賀県園芸農産課 提供)

佐賀牛

- 肉質等級など厳しい基準をクリアした高品質な牛肉だけが佐賀牛と認められ出荷されます。



(佐賀県観光連盟 提供)



(佐賀県観光連盟 提供)

嬉野市の茶畑

いちご

- 新ブランド「いちごさん」が平成30年にデビュー。
- バランスの良い甘味と酸味が特徴。



(佐賀県教育委員会 提供)



(佐賀県畜産課 提供)

調べて
みよう!

佐賀県の畜産物は
他にどんなものがあるかな?



佐賀県の概要
第1章

佐賀県の歴史
第2章

佐賀県の人物
第3章

佐賀県の文化
第4章

佐賀県の自然
第5章

佐賀県の産業
第6章

佐賀県の食文化
第7章

げんかいなだ
玄界灘と有明海の2つの海では、ともに好漁場として古くから漁業が行われ、人々に多くの恵みをもたらしてきました。先人の知恵によるさまざまな漁法も伝えられています。

□玄界灘のクジラ漁

現在では食べられる機会が少なくなったクジラは、古くから重要な食料として日本人の生活を支えてきました。江戸時代、組織的な捕鯨の技術は和歌山から四国、九州へと伝わり、呼子町小川島も玄界灘を通るクジラ漁で栄えました。

『肥前国産物図考』より小兒の弄鯨一件の巻(部分) 江戸時代の捕鯨の様子(佐賀県重要文化財)



(佐賀県立博物館蔵)

中尾組による呼子のクジラ漁の発展

- 1704(宝永元)～1715(正徳5)年頃、初代中尾基六が突取法による捕鯨を開始
- 二代中尾基六が網取法を開始
- 三代基六の頃、漁場を広げ巨万の富を築きました。「突取法」…もりや剣で突きしとめる漁法
「網取法」…クジラを網に追い込み、弱らせてからもりや剣で突きしとめる漁法

クジラ漁の拠点となった小川島とその周辺



大勢で行われたクジラ漁

クジラが回遊する12月から3月頃まで、40～50の船団、500人も的人员で行われました。

＜それぞれの船の役割＞

- 勢子船→クジラを網に追い込みもりを打つ
- 双海船→2艘1組で網を張る
- 持双船→捕獲したクジラを運ぶ

呼子のクジラ漁の終わり

1949(昭和24)年、国際捕鯨協定により、クジラの捕獲が禁止となり、1950(昭和25)年に小川島の捕鯨は姿を消しました。

「鯨一頭で七浦がにぎわう」とまで言われるほど、鯨は食用の肉だけでなく、油、皮、ヒゲなども余さず利用され、人々の生活を支えました。

□有明海の伝統漁法

河川からの栄養分が多く、珍しい魚介類も多数生息する有明海では、特色のある方法で漁業が行われてきました。干満差を利用した漁法も見られます。

『有明海漁業実況図』より江戸時代の四つ手網漁の様子



(個人蔵、寄託先：佐賀県立博物館)

伝統漁法の一例

竹羽瀬



(佐賀県有明水産振興センター 提供)

竹をVまたはW字形に立て、網を取り付け、潮の干満差を生かして魚をとります。

手押し網(しげ網)



(佐賀県有明水産振興センター 提供)

船のへさきに大きな三角網を取り付けて下ろし、魚が入る頃合いを見て、てこの原理で網を上げます。

四つ手網



(佐賀県有明水産振興センター 提供)

竹をX字に組んで網を張り、支柱の先端に結わえ付け、網を上下させて魚をとります。「棚じぶ」とも呼ばれています。

特定の生き物をとる漁法も!

むつかけ

「押し板(渦スキー)」でムツゴロウに近づき、竿の先の糸に釣り針をつけてムツゴロウの少し先に落とすように投げ、素早く引っ掛けます。



(佐賀県有明水産振興センター 提供)

調べてみよう!

ワラスボをとるにはどんな漁法があるかな?



□それぞれの海における養殖

玄界灘および有明海ではそれぞれの海の特徴を生かした養殖漁業が行われています。

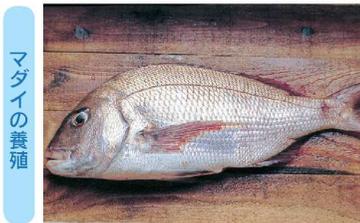
玄界灘の特徴

- ・複雑な海岸線で種類豊富な生き物が生息
- ・黒潮から分流した対馬暖流が多彩な魚を運ぶ

＜主な養殖物＞ マダイ、アコヤガイ（真珠）、クルマエビ、アワビ、ヒオウギガイ、アカウニ、カキなど



いりす 生簀で管理され育てられる (佐賀県水産課 提供)



マダイの養殖

約3年後に水揚げする (佐賀県水産課 提供)

有明海の特徴

- ・日本一の干満差（最大6m）。干拓ではほぼ直線の海岸線
- ・多くの河川が注ぎ、ノリの養殖などに適した栄養分と塩分を保つ

＜主な養殖物＞ ノリ、カキ



いりす 養殖 (佐賀県水産課 提供)

カキ殻培養（ノリの種作り）



ノリの養殖

支柱式養殖 (佐賀県水産課 提供)

◎佐賀海苔ができるまで



(佐賀県観光連盟 提供)

つみとられ加工された佐賀海苔

*干出とは、干潮時にノリ養殖の網が海面上に現れること。干出を繰り返すことで、ノリが丈夫に育ち、旨味が増します。

□呼子のイカ(玄界灘)

日本三大朝市で知られる呼子は、近年、イカの活き造りで有名になりました。新鮮なイカを求めて県外からも多くの観光客が呼子を訪れています。



呼子のイカの活き造り (佐賀県観光連盟 提供)

＜イカの種類＞
夏場はケンサキイカ、冬場はヤリイカ、春先にはアオリイカなど、一年を通してさまざまなイカが食べられています。



ポイント
ケンサキイカはデリケートで長時間の輸送に耐えることができません。



集魚灯を用いるイカ漁 (佐賀県水産課 提供)

調べてみよう!

全国には呼子の朝市他に、どんな朝市があるかな?



□まえうみもん(有明海)

珍しい姿・形をした有明海の魚たち。目の前の有明海でとれた海産物は、沿岸地域に住む人々から感謝と親しみを込めて「まえうみもん」と呼ばれています。

まえうみもん一例

(ムツゴロウ、タイラギ以外の画像は、佐賀県有明水産振興センター 提供)



ムツゴロウ (吉田善美明氏 提供)



フラスボ



ハゼクチ



アゲマキ



ウミタケ



タイラギ (吉田善美明氏 提供)

交通網の発達により、物流拠点として大きな役割を果たしてきた佐賀県。今後の発展が期待される産業に関連した施設の建設など、次世代に向けた取り組みも進んでいます。

□交通の拠点としての佐賀県

陸路

■鳥栖ジャンクション

九州を東西と南北に結ぶ高速道路が交差する鳥栖市は、陸路輸送の重要な拠点です。これにより多くの企業や工場が進出し、佐賀県の経済発展に大きな役割を担ってきました。



(佐賀県新幹線・地域交通課 提供)



(PIXTA 提供)

■鉄道

佐賀県には、長崎本線・佐世保線・九州新幹線・西九州新幹線などの鉄道が整備されており、九州新幹線を利用すると新鳥栖駅から鹿児島中央駅まで最速で1時間15分程度で行けます。

空路



(佐賀県空港課 提供)

■九州佐賀国際空港

国内線と国際線が運航され、国内外の人・モノ・情報の交流拠点となっています。また、旅客便では、新鮮な農作物や海産加工品など軽量の荷物が輸送されています。

海路



(佐賀県伊万里港振興会 提供)

■伊万里港

海の玄関口として韓国をはじめ、中国、東南アジア間で多くのコンテナを利用した輸出入が行われています。博多、北九州、志布志に次いで九州4位の国際コンテナ取扱量です。

□期待される産業

■シリコンウェーハ

シリコンウェーハは、高純度の珪素（シリコン）から切り出された円形の薄い板（ウェーハ）で、パソコンなど電子機器に欠かせない半導体デバイスを作るための材料として、伊万里市内の企業で製造されています。また、江北町にもシリコンウェーハ関連の事業所があります。



(九州シンクロトロン光研究センター 提供)

■放射光（シンクロトロン光）

鳥栖市の九州シンクロトロン光研究センターは、高速で飛ぶ電子を磁石の力で曲げて得た光で半導体や電池、プラスチックなど、さまざまな材料の解析を行う施設で、企業や大学などの研究に役立てられています。

調べてみよう!

シンクロトロンとはどんな装置でどんなことができるのか、調べてみよう。

